「心の目を開く神のことば」

エペソ人への手紙６：１１－１７

October.18.2026

エペソ人への手紙６：１１－１７（パワポ）

Preface

今日が最後になりますが、先週に続けて、「御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい」ということについて考えて行きたいと思っております。

今読みました聖書箇所で、私たちの格闘は血肉に対するものではなく、もろもろの悪霊に対するものだと教えて下さっていますが、サタン・悪魔が、しきりに私たちを煽りけしかけてくるのは、一つの出来事や一つの場面をもって、物事全てを結論付けさせようとすることかもしれません。

それまでの歩み、これからのこと、そのすべてが悲劇でマイナスでしかないと結論付けさせようとして来るように思います。

例えば、イエス様が、聖霊に導かれて荒野に出て行き、四十日四十夜、一切食べ物を口にされなかった断食という肉体的、物理的困難を通られた時、悪魔は、イエス様をけしかけてきました。

「あなたが神の子で、父なる神があなたとともにいるというのに、何で荒野なんていう何もない、寂しく、わびしく、危険な所で過ごさなければならないのか？　しかも、『何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと心配しなくてよいのです。それらのものがあなたがたに必要なことを父なる神様は知っておられ、それらのものを加えて与えてくれる』と言うのに、四十日四十夜、一切食べ物なんか与えられず、骨と皮だけの姿で、今にも死にそうなみすぼらしい状態になっている。それでも、あなたは神に愛されていて、あなたのその歩みのうちに父なる神がともにいて下さっていると言うのか？　そんな馬鹿な迷信じみた信仰などに振り回されないで、この世の力に頼りなさい。この世の力に頼るならば、荒野なんか行く必要もないし、いくらでも美味しいものが食べられるから」とけしかけてきました。

四十日四十夜というひと月ちょっとの出来事・場面をもって、「あなたの人生のすべてにさっさと早く結論を下して、神に背を向け、神とは違う方へと進みなさい」とけしかけてきました。

そこに、父なる神様の深い意図とご計画があるにも関わらずにです。

このようなことは、イエス様だけでなく、私たち人間すべてに、サタン・悪魔が、毎日、毎瞬間、仕掛けて来ることのように思います。

そして、こんな時に求められるのが、神の６つの武具のうち、唯一攻撃を担う武具、「御霊の剣、すなわち神のことばを取る」ことなのでしょう。

Part One

私には一つ悪い癖があり、家内からもよく指摘されるのですが、一つの出来事や場面をもって、物事すべてを否定してしまいがちだということです。

一つの辛さや一つの苦しみや一つの痛みをもって、それまでの歩みを、祝福を、恵みを全部否定してしまう。

あたかも、「そんなものなんか僕の人生にはなかった。全部これまで僕が全部我慢して来ただけで、恵みもなければ、助けもなかったし、ただあったのは、疲弊と痛みだけだった」と、まんまと、サタン悪魔のけしかけにどっぷりつかってしまっているかのような心境に陥ってしまうという悪い癖があります。

でも、そんな時、いつも、そんな状態から今一度、神の国と神の義を求めるよう視点を変えられ、埋められた墓から息を吹き返して生き返るようにしてくれるのが、御霊の剣である神のことばでした。

もちろん、すぐ近くにいる家族や仲間の声掛けや関わりも大きな助けとなりましたが、根本から立ち直らせてくれたのは、いつも、聖書の御言葉でした。

喜劇王と言われたチャーリー・チャップリンという方をご存じかと思いますが、このチャーリー・チャップリンが、こんな言葉を生前残しました。

「人生は、近くで見ると悲劇だが、遠くで見ると、喜劇だ。」

確かに、私たちの人生は、近くで見ると涙ばかりが見えがちかもしれません。

痛い言葉一つが、私たちの心を一杯にしてしまうことがあります。

閉ざされた門一つが、「人生一巻の終わりだ」と、心底思えてしまうことがあります。

でも、少し遠く離れて見てみると、その出来事・場面の前と後ろに繋がっている道が見えてきます。

気付き得なかった「出会い」の意味が浮き彫りになり、涙の中に見えていなかった、恵みの跡を発見します。

唯一まことの神を信じる、救い主イエス様を信じるという信仰は、人生を遠くから見、また遠くを待ち望む目を開いてくれるように思います。

今日の苦難と正直に向き合いながら、神様がお書きになったこれまでのストーリーと、これからの次のストーリーを待つように、待てるようにしてくれる力があります。

なぜならば、私たちは、今、一場面を生きていますが、主なる神さまは、私たちの人生全体を見ておられるからです。

そして、正に、そのことに気付かせて下さる御霊の剣こそが、聖書のことばだと思うのです。

Part Two

聖書の創世記を見ますと、ヨセフという人が登場してきます。

ヨセフのその人生における、正に一番の悲劇は、実の兄たちに殺されかけ、奴隷として売り飛ばされてしまったという出来事だと思います。
その出来事、その場面一つとっても、もう十分に、人生一巻の終わりだと思えて当然だと、正にその人生、悲劇でしかないと思えて当然だと思います。
投げ込まれた地面の大きな穴から引き出されたかと思ったら、愛する父が待っている家に帰るためではなく、見知らぬ地へと奴隷として連れていかれるためだった。
連れていかれたエジプトの地で、それでも、そのおかれた場所で一所懸命に生きてみようと日々努めてはいたけれども、あらぬ濡れ衣を着せられて、牢獄に入れらてしまった。
また一つ、人生における大きな扉が閉じられたように感じたはずです。

もし、ここで、その人生が終わったならば、どれだけ寂しく、みすぼらしく、みじめな人生だったと思えてしまったでしょうか。
でも、神様は、牢獄にあってもヨセフとともにおられ、後の日に、自分のいのちを殺めようとした兄弟たちを赦し、愛し、生かし、助ける者となったばかりか、大飢饉が見舞う中、沢山の人々のいのちを生かす者となりました。
そして、告白した言葉がこの言葉です。

創世記５０：１８－２１（パワポ）

「安心させ、優しく語りかけた。」
兄たちがヨセフにしたことは、確かに悪でしたが、主なる神様は、ヨセフの人生を悪に引き渡すようなことはなさいませんでした。
またヨセフ自身も、サタン悪魔が望むような、一つの出来事をもって物事全てを結論付けてしまうようなことをしませんでした。
その代わりに、「安心させ、優しく語りかけ」ました。

ルツ記のナオミも、深い喪失を経験しました。
ユダのベツレヘムから異邦の地モアブに移住して、夫を失い、二人の息子を失いました。
故郷のベツレヘムに帰って来た時には、「私は出ていく時には満ち足りていたけれども、素手で帰って来ました」と告白する程に、何もかも失ったような状態に陥りました（ルツ記１：２１）。

しかし、その隣には、亡き息子の妻ルツがいました。
神様は、ルツの愛とボアズの優しさ・気遣いを通して、ナオミの人生を逆転させて下さいます。
ルツ記の最後には、ルツとボアズの間に生まれた赤ん坊オベデを、ナオミが、ナオミ自身の子であるかのように喜び、その胸に抱く場面が出てきます。

ルツ記４：１３－１７（パワポ）

ナオミの懐に抱かれている赤ん坊オベデからダビデが生まれ、ダビデから、イエス・キリストが生まれるという系図、祝福が、この後、展開していきます。
ナオミの人生もまた、確かに、神の御業の中にありました。

もう一人、ダニエル書のダニエルは、幼き頃に、捕虜として敵国バビロンに捉われて行きました。
代々住み慣れた地を離れ、引かれて行ったバビロニア帝国の言葉と文化を習得しなければなりませんでした。
自分の思いに従って選ぶことの出来ない日々が続きました。

ですが、主なる神様は、捕虜として捉えられて行った地にあってもダニエルを掴んで放すことはなく、自分たちを捕虜としたバビロニア帝国が滅び、その帝国を支配するようになった新たな帝国ペルシアが立つという激動の中にあっても、ダニエルは、神への祈りを紡いでいきました。
そして、晩年、神様から平安の約束を受け、永遠の相続があることを告げられて、ダニエル書は終わります。

ダニエル書１２：１３（パワポ）

この世における人生を神が守り、この世の人生が終わった後においても麗しい休息があり、「時の終わり」、つまり、天地が滅び失せた後にも、永遠のいのちにおける相続の約束をダニエルは受けました。
正に、一時の出来事や場面をもってすべてを結論付けてしまう人生観からの脱却を、主なる神様にあって経験しました。

イエス様も、十字架に架かられた時、弟子たちの目には、「すべてが終わった、もう一巻の終わりだ」と映りましたが、終わりではありませんでした。
誰も動かすことの出来ない大きな石の扉で閉じられた墓に、死んだイエス様は葬られましたが、父なる神様は、その墓を超えて、復活の朝を準備しておられました。
イエス様は、死に打ち勝ち、復活され、天に上られ、十字架の傷をその身に帯びた復活の主イエス様が、栄光のうちに、今も生きておられます。
そして、そのイエス様が、主イエスを信じる者たちすべてのために、今もとなして下さっておられます。

聖書は、このように、涙と傷と痛みを過ぎ、いのちと喜びに繋ぐ話を、私たちに語ります。
この話を、私たち自身の話だということを悟らせるために、気付かせるために、刻むために、日々、「御霊の剣である、神のことばを取りなさい」と教え

諭して下さいます。

Part Three

サタン悪魔は、一つの出来事や一つの場面をもって結論付けさせようと、私たちを煽りけしかけてきますが、御霊の剣である神のことばを取ることは、その煽りとけしかけを断ち切ります。

涙と傷と痛みを過ぎ、いのちと喜びに繋ぐ話があることを思い出させ、悟らせ、心に刻んでくれるのが、神のことばである聖書です。

神のことばは、人生を遠くから見る目を養えるよう訓練してくれますし、「今日の一場面が人生のすべてだ」としてしまいがちな思いや視線を正してくれます。

今理解出来ないからという理由で、何の意味もないと決めつけてしまうことを防ぎ、痛い時に痛いと、苦しい時に苦しいと、辛い時に辛いと祈れるように導いてくれます。

流れ落ちる涙を我慢することなく、安心して泣くことが出来るように平安を与えてくれます。

まだ知ることの出来ていない次のページが神の手にあることを思い出させてくれます。

それが、私たちの心の目を開いてくれる、御霊の剣、すなわち神のことば、聖書です。

私は、たまに散歩をしに、筑波山の麓から登山口の方に向かって歩いて登っていくことがあるのですが、登山口のあたりに行くだけでも、見える景色が全く違って見えてきます。

大きな霞ケ浦も見えますし、つくばや土浦の町が目の前一杯に広がっている広大な様子を見ることが出来ます。

山に登れば、見える景色が変わります。

低いところではあんなにも大きく見えたものが、高いところに登りますと小さく見えます。

何を言いたいのかといいますと、私たちのたましいにも、登らなければならない山があるということです。

御言葉の剣、すなわち神のことばを読み、聞き、食すという聖書の言葉を黙想するという山です。

１６００年代のイギリスの説教者であったトーマス・ワトソンという方が、「聖書の黙想の山に登りなさい」と勧めたことがありますが、聖書の言葉を黙想する山に登るならば、イエス様が、もっと鮮明に見えてくることでしょう。

神の約束が、使徒パウロ先生の祈りのように、どれだけ偉大なものであるのか、その大きさを見ることが、たましいが覚えることが出来るようになるでしょう。

逆に、私たちを苦しめる問題や心配や恐れが、小さく見えてくるか、または、山に登れば同じところの景色が変わって見えるように、見えてくることでしょう。

ピリピ人への手紙４：７（パワポ）
そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

という壮大な見晴らしが、私たちの中にも芽生えてくることでしょう。

Part Four

先週もお話ししましたように、聖書の言葉を読み、黙想することには、労力が伴います。

一度読んだからと言って、そのすべてを悟ることは出来ないでしょう。

金づちで釘を打つのに、金づち一振りで釘が深く入って行かないように、聖書の言葉も、一度読み、一度聞いたからといって、そのすべてが私たちのものになるわけではありません。

大切な御言葉であればあるほどに、何度も、何度も反復して考え、思い、刻み、食していく必要があります。

御言葉**を**私たちが見るのではなく、御言葉**が**私たちを見るようになるまで、聖書の言葉が、私たちを貫くところまで黙想するのです。

聖書の言葉を読み流すのではなく、もちろん、読み流すことも大切な聖書の読み方だと思いますが、それ以上に、たった一つの聖書の御言葉が、私の心に刺さるまで、ストンと落ちて来るまで、貫き通すまで、黙想するのです。

長く、多くの量を読むのも大事かもしれませんが、それ以上に、たった一箇所の聖書の御言葉で十分なことの方が多いのかもしれません。

そのたった一箇所の聖書の言葉に、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けて頂くのです（ヘブル 4:12)。

私たちの心のうちにあるものが何なのかを見極めて頂くのです（申命記 8:2)。

聖書の御言葉一つを掴むのです。

そして、聖書の言葉を黙想することは、私たちの感情を温かくしてくれます。

ヨセフがそうであったようにです。

聖書の言葉をたくさん読み、どんなに聖書知識に長けていても、心が冷たいことは大いにあるように思います。

だから、御言葉を黙想するのです。

聖書の言葉を時間をかけて黙想すると、焚火のように温かい火が、心の中にともされます。

冷たい知識が愛となり、御言葉が賛美となり、神の約束の希望となります。

また、御言葉の黙想自体が祈りとなり、祈りを豊かにしてくれます。
祈ろうとするけれども祈りが出て来ない時、皆さんもありますよね？
そんな時私は、聖書を開き、聖書の言葉をゆっくり読みます。
そして、その呼んだ御言葉を、再び神様にお返しいたします。
そうして、それが祈りとなり、御言葉の黙想が、祈りの燃料になって行きます。
御言葉の黙想が道を開き、その後に、祈りが続いてきます。

そのように蓄え刻んだ御言葉は、サタン悪魔の誘惑を受けた時に、私たちを誘惑の瞬間から守ってくれるようになるでしょう。
憎しみ、怒り、高慢、不信仰、知ったかぶり、見下げたり見上げたり、過剰な正義感という誘惑から、または、苦難や痛みや辛さをもって安易に結論付けようとする誘惑から守ってくれることでしょう。
落ち込んだところから、私たちをもう一度引き上げ、立ち上がらせ、立たせて下さることでしょう。
これが、「御霊の剣、すなわち神のことばを取る」ということなんだと思います。

Conclusion

ダビデが詩篇の中で、「私は夜明け前に起きて、叫び求めます。あなたのみことばを待ち望んでいます」（詩篇 119:147）と詠っている箇所がありますが、私自身にとっても、朝の聖書の御言葉の黙想の時間は一番大切な時間です。
その時間が、その日の最初の実りを頂く時間になりますし、一日を主に期待し、お委ねし、主にあって心を整え直す時間になります。

その時間を通してこれまで学ばせられたことは、朝一番に何を考えるのかが、何を体に入れるのかが、その日を決める程のインパクトがあるということです。
神のことばを真っ先にこの体に入れるならば、神のことばによる統治が芽生えます。
時には、多くの御言葉が必要な時もありますが、たった一つの、たった一箇所の聖書の言葉の中に、生き方の変革があります。
御言葉をもって心が温まれば、真理を生きたいと願うでしょうし、その願いがまた、御言葉の黙想へと帰らせてくれます。

日々、御霊の剣、すなわち神のことばを取る山に登り、そこにおられる主に出会いたいものです。
そして、山から下りて来る時には、神のことばを胸に抱き、神のことばの香りを放ち、昨日よりも少しイエス様に似た者となって下りて来たいものです。
お祈りいたします。

祝祷：御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。